

行列に並ぶ人

sanukisoba

ホテルのロビーを思わせる豪華なエントランスを持つビルの一室で宣伝用の映像を見た後、息つく間もなく代表の挨拶やメンバーの話が聞かされ、処理しきれないほどの情報を2時間弱の時間で矢継ぎ早に与えられたばかりの大学生2人が目の前に座って俺の話に興味深そうに聞いている。オフィスビルでは考えられないようなエントランスをあつビルが持っているのはあのビルがオフィスビルではなくて時間貸しの会議室や個室で構成された建物だからだし、映像も話も時間が長く横文字がやたら多くはあるけれど全く中身の無い話はどんなに頭が良くても理解できるような内容ではないし、すぐに喫茶店に連れてきたのは外部と接触する時間と落ち着いてビルでの話を消化する時間を与えないためだ。もちろん、目の前の彼らが退出した30分後には次のカモがあつ部屋で同じ茶番を見せられるというスケジュール上の問題もある。じゃあ、コーヒー1杯300円もしないような安い喫茶店で話をすれば理由は何ぞかという、それは単純で俺たちの懐具合があまりよろしくないからだ。

俺の目の前に座っているのは、偏差値で評価するところの二流大学に通う男子学生2人。いずれも地方から出てきて2ヶ月目の1年生。俺らのテーブルの両隣もやっていることはこのテーブルと同じで、もちろん学生を前に座っている人間はいずれも同僚だ。話を始めてから10分程度。今後の展開のためにも俺はタバコを取り出しながさりげなく両隣のペースを確認し、タバコに火をつけて余裕たっぷりな態度で彼らとの話を続ける。隣テーブルで同僚の向かいに座っている大学生の女が席を立ち俺の横を通り過ぎる。

「それで、確かにテキストは安くはない。いや、安くはないって言ってもこのテキストの価値を考えればタダと言ってもおかしくないくらいバーゲンプライスなわけだけど、少なくとも大学入りたての人から見れば安くはないよね。でもさ、このテキストでちゃんと勉強すればお金なんて困らないようになるわけ。するとさ、最初にお金借りたとしてもすぐ回収できるって、そうは思わない？」

灰を落としてながら彼らの答えを待つ。大切なのは彼らに自分で考えて結論を出したと思わせること。でも、じっくり考えさせてはいけない。あくまで回答を誘導し、答えは彼らに言わせる。だから実際のところ彼らは考えたりせず俺らが求めている答えに誘導されているだけなのだが、最終的に彼らが自ら口にするという形式が思いの外重要なのだ。

「いやいや、実際のところ高いのは間違いないですよ。バイト代何ヶ月分だって話ですし」

と岐阜から出てきたばかりの帽子を絶対外さない田舎者が一丁前に言う。「でもさ、稼げる額が増えれば使えるお金も増えるって思うでしょ？」と俺は畳み掛ける。

「そうですねえ。そりゃ、お金が稼げるなら負担になる金額って変わりますよね」

これは新潟から出てきた黒縁メガネ。

地方から出てきたばかりの未成年を狙うのが俺の中では鉄則となっている。若さゆえの見栄が地方から出てきたからってなめられたくないという気持ちや未成年だからって自分で何も決められないとは思われたくないという気持ちが相まって、こういうビジネスに欠かすことのできない美味しい漁場となってくれるのだ。

「これがさ、例えば贅沢品を買うための借金だとしたら話はわかるわけ。そんな金額借金して大丈夫かって考えちゃうのも当然。でも、自分への投資だと思えば見方は変わってこない？自分への投資だけど、しっかり勉強すればそれを上回る利益を得られるんだから、それは立派な投資なわけ」

「それはたしかにそうかもしれないです」黒縁。

「俺も最初は」とここで一旦言葉を区切ってタバコを消す。この間が重要だ。「こんな金額払えないよって考えたけど、思い切って飛び込んでみたわけ。それで一生懸命勉強したらさ、数ヶ月でいつの間にか口座にはテキストの代金の金額が振り込まれてたわけ」

帽子がびっくりした顔で「マジですか」と前のめりになる。

「俺の時と今もシステムは変わってないからさ、たしかに保護者の名前を書く欄はあるけど保護者には絶対連絡がいかないし、返済が始まっても月々数千円で済むからバイト代で返せるし負担にもならないよ。それで、テキストが想定している半年から一年の勉強期間が過ぎれば投資で稼げるようになってるわけ。俺自身そうだったからこれは保証してもいいよ」

そう言って笑いかけたところで2人が俺の後ろを見やる。予定通り矢上さんが来たのだとわかる。女子大生はいつの間にか隣のテーブルに戻っていた。偉そうな態度で俺の横の椅子を引いて腰掛け、俺に「よう」と声をかける。俺はいつものように姿勢を正して「お疲れ様です」と丁寧に挨拶をする。俺の使っていた灰皿を自分の前に引き寄せて矢上さんは話し始める。俺は肩幅を狭めるようにして恐縮している姿勢を見せる。説明をしなくてもこうした態度を見せれば大抵の子供は今来た人が偉い人なのだとわかる。黒縁も帽子も当然、若干緊張の色を見せる。

「今日は来てくれてありがとうね」

矢上さんが話しかける。二人が「いえ」とか「はい」とか言葉にならない声を発する。矢上さんは俺に「火貸して」とぞんざいに言ってから話を続ける。

「俺も君たちみたいに大学1年生の頃は投資なんて全然知らなかったけど」俺が出したライターでタバコに火をつける。「必死こいて勉強したらすぐにわかるようになったし、わかるようになったらお金も自然と手に入るようになったよ。その頃は今日のセミナーで話したテキストもまだまだ洗練されてなくてね、俺たちみたいな初期のメンバーが情報交換したり勉強会を繰り返したりしながら今のテキストにしたの。手前味噌な話になるけど当時のテキストに比べたら画期的なテキストになってると思うよ」

大きく煙を吸い込み、吐き出すという「間」を十分に使う。2人は黙って続きを待つ。

「勉強してお金が入るなんてすごいと思わない？大学なんてお金払って勉強させてもらうのにお金が入る上に成長できるんだよ？」

矢上さんのこのフレーズは学生をどうにも刺激するらしく、この一言がきっかけでただのカモだった大学生がいそいそとカバンの中からネギを出し始めるシーンを俺は何度も見ている。そして今日も。2人の態度が明らかに変わったのがわかる。

「俺も大学出たけど、それはトレーダーとして経営者になるためには大卒の肩書きがあった方が日本では便利だからであって、正直能力あれば肩書きなんて関係ないの。少なくとも俺たちと一緒に活動しているうちは。俺も大学で学んだことなんてほとんどなくてこのグループで学んだことがすべてなの。ただ、俺たちから見たら迷いようのない決断で、瑣末な決断であったとしても君たちにとっては大きな決断だってことはわかるよ。だって人生を変えるような決断だもん。だからゆっくり自分で考えてごらん」

と言い、俺には「じゃ」と言い残して去って行った。効果は抜群で俺が学生2人に目をやると彼らは目から鱗が落ちましたと一生懸命顔に書いている途中だった。たいしたもんだよなあと毎度のことながら思わせられるけれど、彼は途中で参加してくるときに絶対飲み物を買うことはない。儲けてるという割にはその辺のセコさが説得力を失わせるような気もするが、子供相手にはそこまでのディテールは気にしなくていいらしい。ハタリは大切だと彼は言うが、スーツにしかお金をかけないから靴もネクタイもシャツも安っぽさが際立つ。気合を入れてスーツだけ買ったら他に手が回らなかった新入社員みたいだけど、やはり子供はその辺りの珍妙さには気づかない。いずれにしても目の前の学生くんたちはちょっとした興奮状態になっているからたたみ込むタイミングだ。

「すごいっしょあの人？」と言うと2人は忙しげに首を縦に振る。「あの人1分って百万円くらいの価値あるの。それが今日ワザワザ話してくれるんだから君たちめっちゃくちゃ恵まれてるよ？自分だってなかなか話聞かせてもらえないもん。勉強になった」矢上さんを神輿にするために俺も口調をくだけたものにする。2人はへえ、と感嘆する。

「あの人ちょっと判断するだけで1千万単位でお金が動くんだから。そんな世界想像できないっしょ？人生失敗したくないなって思ったらやっぱああいう人に近付きたいじゃん？」

2人がもちろんです、とかさうですよ、とか目をキラキラさせて応える。

「俺なんかもさ、学生の頃は全然お金と縁遠い人生だったけど今なんかしっかり収入があって銀行からも信用されてるから、このカードを機械に差し込むだけであっさり百万円くらい貸してくれるわけ。学生の頃だったら想像もできない金額だよ？でもそれくらいの金額なんて俺レベルでも1日もあれば簡単に稼げちゃうからさ、実際のところお金を借りる必要なんてないんだよね」

色々仕掛けてきたハタリは順調に作用しているようで、黒縁君が「俺、水持ってきます」と俺の前のグラスを手にとって席を立った。ここまでくれば多分この2人が書類にサインをするまでには1週間もかからない。

「投資で生計を立てればさ、サラリーマンみたいにスーツ着て満員電車に乗ったりしなくていいわけ。そんな無駄な時間と体力あったら勉強して投資の技術学んでさらに上に行けるわけ。一旦この仕組みに乗れば雪だるま式に人生うまくいくの」

黒縁君が戻って来る。

「学ぶなら1分でも早い方がいいわけ。自分の1分がいくらになるか今まで考えたことある？」

2人が首を横に振る。それはそうだろう。俺だってそんなの考えたことなんかない。

「大学で学ぶことなんて所詮は理論なわけ。でも俺たちが学んでるのは実践なの。ただね、実践と理論って別々のものじゃなくて実践をベースに学ぶと自然と理論も身につくの。理論学んでから実践学ぶのと実践の中で学ぶのとどちらがお得な人生だと思う？」

「それは実践ですよ」帽子君が言う。黒縁君もそうですよねと相槌をうつ。

「ちょっとでも賢い頭を持ってればそれくらいすぐわかるわけ。でも、ほとんどの人がそれに気付かないんだよね。敷かれたレールの上を歩くことしか考えないといつの間にか頭使えなくなっちゃうのよ」この台詞はどれも劣等コンプレックスを抱えた学生にはやたらと響くらしく、この部分を言うか言わないかでその後の流れが変わってしまうと矢上さんからは念を押されている。そしてここから暫くはこの劣等コンプレックスを刺激する時間帯になる。

「俺ね、指定校で慶應に入ったのよ。慶應には見えないっしょ？馬鹿だと思ったでしょ？」この台詞の説得力を高めるために俺は髪を茶色にし、極めて軽薄に見えるようなファッションを心がけている。それが功を奏したのか黒縁君が「いやいや」帽子君が「たしかに慶應って感じはしないですけどでも馬鹿には見えないですって」。そして俺は慶應なんか出ていない。

「高校時代はさ、真面目に勉強してたから成績も良くって指定校いくらでも選べたわけ。その時俺は慶應商学部が一番稼げると思ってて東大とか受ける気もなかったの。慶應商学部なんて慶應の中でも大したことないじゃん？」ここで2人は首をブンブンと横に振る。「まあでも高校だけはとにかく学校トップだったわけ。で、地元でもトップの高校にいたから指定校使うって言ったら指定校を当てにしてたやつらがとにかく焦っちゃってさ」2人がしきりと頷く。「でも俺が慶應の経済とか早稲田の政経とか言わないで慶應の商学部って言ったからそいつらなんて驚いてるわけ。棚ぼただった」

一息ついて黒縁君が持ってきた水を飲む時、視界の隅にさっきまでいなかった男の影がうつる。派手なオレンジのポロシャツに坊主頭のそいつは俺の視界に入った時ちょうどスマートフォンの画面を見ながら笑っていた。あんな目立つ奴がいうの間にかきていたのに俺は気付いていなかった。これはよくない傾向だな、と自分を戒める。

「でも、このグループに入ったら国士館とか出てる人の方が俺の数倍稼いでるわけ。すごい？留年とか中退とか成功には関係ないわけ。飲食店でフリーターやってた人とかでも数千万稼いだりするの。慶應とか下手な大学出てる方がプライドが邪魔して学べないわけ。そーゆーの本当キモくて、学校とか関係ないって俺は思うの。どう？亜細亜大でも全然問題ないし中卒でも問題ないの」

ポイントは、彼らの大学と同ランクの大学をここで出すこと。まかりまちがっても彼らの大学より下のレベルの大学を例に挙げてはいけない。そして俺の出た大学はここで挙げた大学のどちらかだ。無論、慶應なんかではないし高校だって指定校推薦を使えるような成績ではなかった。というよりはお情けで卒業させてもらったくらいだ。

でも、そんなのここでは関係ない。学歴なんて関係ないんだ。嘘はすらすらと出てくる。

「俺も慶應出てるけどそれを肩書きに使いたくないわけ。だって俺大学では何も学べなかったけど、グループがすべて教えてくれたから。世間はそりゃ慶應って言えば尊敬してくれるよ？でも慶應大学は何も教えてはくれなかったわけ」

2人の目がだんだんと輝きを増している。

「例えばさ、慶應ってお嬢様多いわけ。マックとか行ったことない子とかたくさんいるし美人もたくさんいるんだけど、そういう人たちが会社員になって社会の歯車になるしかないわけ。で、その子たちのゴールって年収一千万の旦那を掴まえて主婦になって食べさせてもらうことなわけ。そういう人たちに囲まれても何も嬉しくなくてね。俺はこういう人生は嫌だなんて思ったの。どう？」

手を組んでテーブルに置き、前のめりになって彼らに耳を傾ける。

「俺そういう女嫌いだわー」帽子。

「わかりますわかります。肩書きと金にしか目がない女っていやですよ」黒縁。

「だよ」と俺。君たちみたいな頭も金もないようなバカがどんなにそういう女を嫌がったところでそういう女たちは君たちに見向きもしないんだから安心しな、といつもいつも思うが、それを悟られるようなことはしない。

「結局さ、慶應の人たちって自分のスキルは何も高めてないから役職とか肩書きとかを求めるの。あとお金ね。俺も金はあるから

同窓会とか出るとわりと人気あるんだけど、そういうところに集まってくる人大嫌いだね。でもこのグループにいると自分の能力を好きになってくれる人しか寄ってこないから。本当の付き合いもできるわけ」

隣のテーブルの女がまた席を立つ。帽子や黒縁の友達としてついてきて隣のテーブルで同じように話を聞いている振りをしてはいるが、そもそもこの女はサクラだ。一番下っ端がやらされる役。席を立ったということはあと数分で次のメンバーが追い込みに来るはずだ。それまでに俺のパートはある程度終わらしておかなければならない。

「結局さ、俺たちのグループは自分たちが高みに登ることしか考えてないわけ。それにしか興味が無いから肩書きとか収入とかどうでもいいの。そういうのは能力についてくるかもしれないけどそんなのおまけなわけ」

2人の顔く姿を見ているうちにますます俺は気持ちよくなって来る。

「そしてグループが大きくなるってことは俺たちがさらに高みに登っているってことだからさらにビジネスの規模が大きくなるわけ。そうやって大きくなることを繰り返していけばやがて社会変えちゃえるって思わない？俺たちそういうことまで考えてるの」

追い込みをかけるために話が飛躍している気はするし、いつもはもう少し丁寧に話を進めるのだが、今日は矢上さんがいつもより遅いタイミングで合流してしまったせいでいつもとリズムが少し違う。

「どお？イメージ湧いた？こんないい話他人に聞かせるなんて怪しく思わない？」

笑いながら問いかけると2人は「あやしいとは思わないけど、不思議ではあります」と答える。これ以外の回答をした人は今まで一人もいない。

「俺たちはさ、能力の高い若者が増えてくれるのはめっちゃくちゃ嬉しいわけ。だって社会変えちゃえるかもしれないんだもん。だから夢を描いて能力高める若者が大好きだし、自分たちのライバルになりうる人たちを増やしてお互いに成長しあっていきたいのよ」

黒縁がしきりと頷く。

「今はまだ大学に入りたてだからさ、就職とかそんなことばかり気になるかもしれないけど、ちゃんと投資を学んでれば企業から見ためちゃくちゃ欲しい人材なわけ。だから就職活動にもなるの。すべてにおいて損はないの。わかる？外国語の成績がAだったやつと、数百万単位の金を自分で動かしてきた学生、どちらが企業にとっては欲しい人材になると思う？もちろん投資で食っていくことは十分可能だから会社の歯車になる必要なんてないんだけどさ」

その代わりにこのグループに入ってしまうえばグループの歯車として新たなメンバーを勧誘し、新たなメンバーに勧誘をさせ、どんどんと会員を増やしていかなければならないことは、今の段階で話すべきことではない。

「明日とか予定あるわけ？」唐突に尋ねる。帽子が「夜からです」と答える。「じゃあ明日昼間とか暇あるなら一度うちの勉強会きてごらん？明日が無理なら来週とかどう？」「どうしようかなあ」「交通費とか気にしないでいいよ。うちが送迎するから。ペントとか乗ったことある？」中古のペントでCDプレイヤーが壊れているけれど、それでも彼らはペントで送迎ということに若干の憧憬を見せる。どんなに車離れが進んでいたとしてもペントの名前はよく効く。

「俺も18歳の頃から投資学べたらなあ、って思うよ。1分1分がこんなに重要だなんてあの頃は気付かなかったから」ここのまです言った時、2人の視線が俺の後方に移動する。おそらくあゆみが近づいてきたのだろう。自慢のFカップを今日も見せつける服で来ているはずだ。

「こんにちは一」と明るいけれど媚びない、会社の警備員にかけようようなトーンの声で2人に挨拶をしながら当然のように俺の横の椅子に腰掛ける。隣から見ると十分にボリュームのわかるFカップの胸は、前に座った人間にもっとも効果的に威力を發揮するような大きく胸元が開いている服に収まっている。「あらためまして、こんにちは」とお辞儀をしながら挨拶をすることで2人の若い坊やはこの女性への興味を隠しきれなくなる。いつ見ても惚れ惚れするくらい導入がうまい。

「彼から話聞いた？明日も勉強会あるんだけど明日のは今日のと違ってメンバーのための勉強会だからレベル高い話聞けるんだけど、どお？」

2人がそわそわしながら「うーん」とか「えーっと」などと音を発する。

「話変わるけどさ、どこに住んでるの」

あゆみの持ち味は胸だけではなく、めまぐるしく変わるこのテンポだ。「胸は所詮スケベな男にしか効かない一発芸よ」と酔っ払った拍子にこぼしていたことがある。それを裏付けるかのようにあゆみは女性に対しても勧誘の成績が良い。

「私今千駄ヶ谷に住んでるの。家賃は高いけどグループのおかげでお金には困らないし都心にすぐアクセスできる投資だと思えば安いと思うよ。タクシーもすぐつかまるから、あ、私移動は全部タクシーなんだけど」

黒縁がなんとか話についてきてはいるが、帽子の方が若干遅れ気味だ。それはあゆみもわかっているらしく効果的なタイミングで間をとる。帽子が遅れ気味なのはもしかすると東京の土地勘がないから話がイメージできていないのかもしれない。俺はすかさず「千駄ヶ谷に住むとか本物のセレブだよな」と適当な合いの手を入れる。それで帽子もイメージはつかめたようだ。

「私今青学に通ってるんだけど、家千駄ヶ谷だからさ、電車だと乗り換えがあって面倒なんだよね。普通のサラリーマンなんて自分に投資しないから電車で移動してるけど、お金で省略できるエネルギーの方が価値あるもん。電車に使うその時間を短縮できるためならそのコストも投資の一環だよな」

あゆみは今のところ嘘しかついていない。家は埼玉県のと光市だし、移動はバスと電車。そして青学にも通ってはならず、中退した短大ですら青学ではない。それでもそんなこと、言わなければ誰にもわからない。学生証を見せてくださいと言うような人はそもそも勧誘の対象にすらならないし勧誘したとしても絶対についてこない。

「自分への投資に絞ればお金なんて水みたいにわいてくるの。でも私たちはお金が目的じゃないの。私たちの明日の勉強会に出ればどれだけ高みを目指してるかわかるよ」

帽子が手帳を取り出す。黒縁がスマートフォンを取り出す。スケジュールを確認しながらどうする、と言葉を交わしている。適度に2人にヒソヒソと話をさせる。そして結論を出させる直前のタイミングであゆみが話を切り出す。絶妙だ。

「周りの子たちは自分に投資って考え方がないから時給いくらとか気にしながらバイトして時間を無駄にしてるの。正直私今やりすぎたなってくらい稼いでるけど、でも私は周りの子たちみたいに時給いくらかのバイトで1日を潰して、その後数千円の居酒屋で

つまらない話して時間無駄にするよりはよほどいい人生だと思ってる」

あゆみが当然のように俺の前に置かれている水を飲み、ありがとうと俺に言う。こうした行動の一つ一つがあゆみにとっては計画されたものらしい。おそらく今日のパターンは積極的な女性に慣れてない田舎者の未成年男子大学生向けのアレンジなのだろう。

「就職活動で先輩とかに会う子と一緒に話聞いてあげたりするけど、夢がないんだよねサラリーマンたちって。それが悲しくてね。お金稼げると見下すというよりかわいそうにしか思えないの。ああ、この人たち自分に投資したらいいのに。気付けなかったんだなって」

あゆみは誰にも口を挟ませない勢いで話を続ける。

「この人慶應卒って聞いた？青学と慶應だと慶應が上って思うでしょ？でも関係ないもん。グループの中じゃ平等だし能力がすべてだから。私よりこの人の方が稼いでるけど、でもコミュニケーション力は私の方が上なの。だから人脈は負けない自信がある。でも私高校まではコミュ障だったんだよ」

2人が言葉を発するタイミングはおろか、相槌をうつタイミングすら掴みかねてあゆみの話についていくのが精一杯になっているのが手に取るようにわかる。

「でもさ、コミュニケーション能力も目標に向かって投資すれば自然と身につくの。投資しないから成長できないの。それに気付けば世界は変わるんだけど、気付けないとそのまま。それに気付けるならばそのタイミングは早ければ早いほどいいじゃない」

2人がここでようやく同意の声を発する。今日のアゆみの役割は明日の勉強会に勧誘すること、できれば再来週に開かれる合宿と称する軟禁勧誘会への参加を取り付けること。ここからあゆみはどのように話をもっていくのか、俺でもそれはわからない。

ただ、時間を考えるともうそろそろスパートをかける頃のはずだ。

「ところでさ、話変わるけど君たち金融系の役員って会ったことある？」

2人が面食らったように顔を見合わせる。俺も何を言いたしたのかわからずあゆみの顔をおもわず見してしまう。これは明らかに俺の失策だが、目の前の坊やたちは気づいていない。間をおかず「会ったことない？それじゃあちょっと待ってて」と言い、あゆみはどこかに電話をかける。今まで何回もあゆみと組んでいるが今回のパターンは見たことがない。あゆみの新しいアドリブパートを今日は見るができるらしい。俺と2人は黙ってあゆみを見つめる。

「もしもし。あゆみだけど、今大丈夫？ありがとう。この前言ってた銀行系の懇親会ってまだ空きある？あれば連れて来たい男子2人いるんだけどどう。大丈夫？本当に？オッケー。じゃあ調整ついたらまた連絡するね」

話は数分もかからずにまとまったらしく、正しくはまとまったことになっただけなのかもしれないが、いずれにせよ外形的には終了し、説明が始まる。

「今度ね、金融系の役員と懇親会があって、私も参加することになったの。本当だったら招待制だから外部の人は参加できないんだけど、私ほら、そこそこな立場にいるから融通きくんだよね。念のため確認してみたら2人くらいなら余裕あるっていうから、君たちもおいでよ。私の紹介って言えば問題ないし他の人より丁寧に扱われるからさ。どう？」

「金融系」「役員」という二つの単語の組み合わせに2人は面食らっているようだ。実際のところは消費者金融のおっさんか何かを集めただけの飲み会なんだろうけれど、自分の知らない世界につながるドアを教えてもらったかのように誤解している2人はそんなこと想像もしていないだろう。

「金融系の役員だからさ、もし投資を活かして就職しようと思ったとしても」ここで一旦言葉を区切り、私はそんな風に就職するつもりになるなんて思わないけどねと笑ってから続きを始める「顔を合わせておくことって有効だと思うよ。ここで内定がもらえちゃう可能性だってゼロじゃないもん。就職活動なんて大学に入った瞬間から始まるんだよ」

2人は驚きと期待に満ちた顔になる。その懇親会の目的はこの2人のようなカモを美味しくいただくことだということを彼らがわかるのはいつになるのだろうか。

「ところでさ」とあゆみが俺の方を見る。これはパスだと気付いた俺は「ん？」と余裕有り気な態度で応じる。

「よくよく見たらこの2人めっちゃくちゃかっこよくない？今度遊びに連れてっていい？」

あゆみの追い込みだ。俺は心の中で苦笑いする。

「俺が決めることじゃないよ。でも、可愛い坊やたちをあまりからかわないでくれよ」

さりげなく2人の方に目をやると困惑した顔をしながらもやはりどこかニヤついた感じが隠しきれていない複雑な表情をしている。完璧だ。ここで合宿や懇親会についていけばひょっとするとこの胸の大きなお姉さんと素敵なことがあるかもしれない、経験の乏しい若者たちにそんな期待を持たせるには十分すぎるくらいの揺さぶりをかけてあゆみは席を立つ。

「じゃあ、勉強会とかどうするか考えてみてね。楽しみに待ってるから」

そう言い残して去っていく。2人はその姿を目で追いつける。あゆみが去ってから俺が付け足すような話は特になし、彼女が残した余韻を彼らが自分たちに都合よく解釈する時間を与えるためにも俺の関与は最小限にした方がいいだろう。そして、間も無く閉店であることを伝えながら店員が店内を回っている。

「あ、こんな時間なんだね。遅くまでごめんね。とはいっても君たちはもう大人だから別にこれくらいの時間どうってことないよね」

微笑みかけると彼らは照れくさそうにしながらも笑う。

「明日の勉強会は当日飛び込み参加オッケーだからさ、気になったら俺の連絡先に連絡してよ。あ、これ俺のプライベート用の名刺ね。プライベート用だから携帯の番号になってるけど、そこに連絡くれればいいから」

彼らが名刺をもらうという行為についてどういう指導を受けているのかわからないが、やたらと恭しくしゃっちょぼって名刺を受け取った。合宿まではまだ時間があるけど、勉強会は明日だからさ、よろしくね、そんなことを早口で伝えながら立ち上がる。彼らも慌てて立ち上がる。じゃ、今後ともよろしくと握手を求めると彼らはやはり慌てて右手を差し出してくる。彼らのうちどちらかは合宿に参加することになるだろうな、ということが今までの感覚からわかる。

去っていく2人の背中を見ていると視界の隅で動く影がある。坊主頭の派手なシャツの男が席を立つところだった。なんの気なく男の顔をぼんやり眺めてみると、隣のテーブルで勧誘している仲間の方を見ながら歩いている。もしあれが警察関係者だったり消費者保護団体の関係者だったりしたら、ということに気にかけていたのは俺がこうしたことを初めて何ヶ月目くらいまでだっただろうか。始めたばかりの頃は人目ばかり気にしていたことに思井を馳せていた時、俺はいつまでこんなことを続けていくのだろうかと思わずにはいられなかった。

俺はいつまでこんなことを続けているのだろうか。続けていられるのだろうか。そんなことを考えている時店員が「お客様、そろ

そろ」と告げに来る。疑問を持つような奴は向いてない、矢上さんは以前そんなことを言っていた。そろそろ、なのかもしれない。ゆっくりと席を立ち隣のテーブルの同僚と一緒に店を出る。そろそろ、とは思っても俺は何をすればいいのか、何ができるのだろうか。喫茶店を出ると道路の向こう側には23時半を回っても行列の絶えないラーメン屋が見える。

ああいう行列に並ぶような人間にはなりたくなかったけど、気づいたら行列に並ぶ人たちを羨ましがるようになっていた。